

GOD WITH US

Part 8: JESUS

Message 18 – The GOOD SHEPHERD

John 10

神は我らと共に

パート8：イエス

第18メッセージ-善い羊飼

ヨハネの福音書第10章

真の羊飼いは門から入る：10：1－3

よくよくあなたがたに言うておく。羊の囲いにはいるのに、門からでなく、ほかの所からのりこえて来る者は、盗人であり、強盗である。（ヨハネ10：1）

イエスの時代、羊の群れは石の囲いの中に保管されていた。頻りに、多数の群れと一緒に群がった。一人の門番がその囲いの中のすべての群れを見張る。門番は、それぞれの群れの真の羊飼いたちが羊を呼ぶためにだけ囲いに入ることを許した。偽の羊飼いが門番を通り過ぎることは出来なかった。

盗人や強盗、偽の羊飼（パリサイ人の様な）が個人的な利益のためだけに羊を利用することを望んだとイエスは主張された。イエスは、彼らとは対照的な真の羊飼である。

門からはいる者は、羊の羊飼である。門番は彼のために門を開き、羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名をよんで連れ出す。（ヨハネ10：2，3）

イエスは、ご自分の群れの世話をされる真の羊飼である。羊は彼らの羊飼いの声を知っている。。。そしてイエスは一匹一匹をそれぞれ名前を知っておられる。その頃、羊は主にその羊毛（肉ではない）のために飼われていた。私たちが犬や猫に名前を付けて愛する様に、羊には個人的に名前が付けられ愛されていた。

イエスが私たち一人一人を名前を知っておられることは、大きな慰めである。私たちがそれぞれ個人的に知っておられる。私たちのすべてを知っておられる。私たちの癖も欠陥も問題も希望も夢も悲しみも恐れも。一般的に羊は、汚く、困難で知能が高い動物ではない！それでもイエスは、ご自分の羊を愛し、善い羊飼として私たちと一緒に人生を歩まれたいと願っておられる。主があなたの善

はじめに

ヨハネの福音書第8章から第10章は、イエスの公的伝導完了間近に起こったパリサイ人との長い論争を記録している。イエスが「世の光」であると主張されたことが論争を招く

（8：12）。イエスは、生まれつきの盲人の目を開くことによって、その主張を証明されるが（9章）、そのことは、更なる論争を引き起こす。第10章では、自分たちの利益のために羊を利用した「泥棒と強盗」である指導者たちとは対照的に、イエスが「善き羊飼」であるというイエスの主張によって議論はさらに高まる。この良い羊飼対悪い羊飼いの論争はエゼキエル書第34章から来る。そこでは、世話をするのではなく、群れを食い尽くす「価値のない羊飼」であるという過去の世代のイスラエルの霊的指導者に対する神の裁きが述べられている。価値のない羊飼いたちが羊の群れを保護することが出来なかったので、神ご自身がその群れを飼うようになると言っている。この様に、イエスは（エゼキエル書の聖句に非常に精通している人々のグループに）、ご自分が、イスラエルの人々の真の羊飼いとなるために神に遣わされ、指導者らが神の民の群れを飼育しなかったことに対する責任を負わされるであろうと言われた。

い羊飼いになるために来てくださったことを今日、感謝しましょう。主に「魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導いて」（詩編23：3）いただくためにお招きしましょう。

羊飼いの声はよく知られている：10：4-6

真の羊飼いについての説明を続けながら、イエスは羊飼いの認識出来る声調についてお話になった。

行く。羊はその声を知っているので、彼について行くのである。ほかの人には、ついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らないからである」。イエスは彼らにこの比喻を話されたが、彼らは自分たちにお話しになっているのが何のことだか、わからなかった。（ヨハネ10：4-6）

当時も今も、それぞれの羊飼いは自分の羊を呼ぶための独自の「声調」と「呼びかけ方」を用いる。羊がその独自の音を聞くと、羊飼いを追いかけて走り寄る。

オークポイント教会の弟子の8つの特徴の1つは、イエスの御声に聞く弟子である。日々、主の御言に時間を費やし、主の霊の促しに注意を払うことを学び、主の共同体の人々と関わり続けるにつれて、主の独特の声に益々慣れ親しむようになる。私たちが主に同調すればするほど、私たちの生活を定義し、方向付けようとする他の声に従うことは心地悪くなる。あなたは良い羊飼いの声を聞くことを学んでおられるでしょうか？イエスの声があなたの人生を定義し、指示していただくことを許しておられるでしょうか？

イエスは羊の門である：10：7-9

討論が進むにつれ、イエスは羊飼いと羊の比喻に複雑さを増される。

イエスはまた言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。わたしは羊の門である。わたしよりも前にきた人は、みな盗人であり、強盗である。羊は彼らに聞き従わなかった。わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。（ヨハネ10：7-9）

イエス様は、次に「わたしは羊の門である。」と言われた。いかに、羊飼いと門の両方になれるのでしょうか？ジョージ・アダム・スミスは、聖地の歴史的地理学の学者／専門家であった。夜に羊が導かれる囲いを彼に見せた、アラビアの羊飼いとこの出会いについて書いた。囲いの上に門がないのに、迷い出ることをどうやって防ぐのかと尋ねたところ、羊飼いは次のように答えた。「全ての羊を囲いの内側に入れたら私があの空いた門に横たわる。羊は私の身体を通してでないと出られない、また、オオカミも私を通してでなければ中に入ることは出来ない。私は門です。」

イエスは羊の囲いの門である。これは、羊の囲いの経路（私たちは「イエスを通して」進むことによって神の家族に入る）、また囲いに入った後の保護（イエスによる保護によって神の家族に「守られる」）の両方を表す。イエスは次の様にも言われた。「だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。」（ヨハネ14：6）。

イエスはご自分の羊に湧き出るいのちをお与えになる： 10：10

盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。（ヨハネ10：10）

そこがイエスと他の羊飼いの違いである。他の羊飼いは、私たちに命を約束するが死へと導く。イエスは、私たちにいのちを約束され、"溢れるいのち"を与えて下さることによって救出して下さる。「豊かな人生」と訳されている翻訳もある。イエスは豊富な富や喜び、あるいは地上での報いについて言っておられるのではなく、神のお目的のために神に最も栄光を与え、神があなたをお造りになられたお目的という点で、あなたを最も満足させる人生の目的、平和、そして権力に満ちた人生について言っておられた。。。

イエスとの関係以外の場（所有物、追求、人々、冒険、趣味、成功など。）で「豊かな人生」を追求してしまいがちであるが、イエスだけが真の「豊かな人生」を与えることが可能である。人生をイエスに委ね、毎日善い羊飼いとして従うようになるとイエスは私たちのためにデザインして下さった旅へと導いて下さる。私たちのためにお造りになられた道を繰り広げて下さる。あなたは日々、真の羊飼いに従っておられるでしょうか？御声を聞いておられるでしょうか？「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。」（詩篇23：1）。

イエス、羊のために命を捨てる：10：11-15

続いてイエスは、ご自身と他のすべての羊飼いとのもっとも重要な違いについて説明される。そして、次の「わたしはある」という言葉を私たちに与えられる。

わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。羊飼ではなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみが見ると、羊をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。彼は雇人であって、羊のことを心にかけていないからである。わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っ

ている。それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨てるのである。（ヨハネ10：11-15）

パレスチナでは、羊の世話をする雇われ人のために「羊飼いの規則」があった。一匹のオオカミが来たら、雇われた羊飼いは群れを守らなければならない。しかし、二匹のオオカミが来たら、自分の命を守るために逃げるのが許された！学者たちによると、実際、真の羊飼いでさえ、羊のために自分の命を落とさない。その様な例はなかった。イエスは違う。イエスは、私たちのために命を捨てて下さった。

父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受け取る力もある。これはわたしの父から授かった定めである。（ヨハネ10：17、18）

イエスは羊を守っています：10：27-30

この箇所のもう少し後に、私たちがイエスの囲いの中の安全性について語られた。

わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る。わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。わたしの父がわたしに下さったものは、すべてにまさるものである。そしてだれも父のみ手から、それを奪い取ることはできない。わたしと父とは一つである。（ヨハネ10：27-30）

パリサイ派の人々は、イエスと父が一つであると主張したときに、再び冒とくのために石を投げつけようとした。イエスの神性は重要なポイントであるが、主なポイントは、私たちがイエスの群れにいるとき、安全であるということである。私たちが父と子の力強い手から奪うことは誰にも出来ない！

新約聖書の中には、「信者の安全」を強調した箇所がたくさんある（つまり、一度救われたら、救いの内に安全であり、二度と失われることはない）。例えば、エペソ人への手紙第1章13、14節には、「約束された聖霊の証印をおされたのである。」と書かれている。エペソ人への手紙第4章30節では、「あがないの日のために、聖霊の証印を受けたのである。」と書かれている。あなたは主の愛において安全ですか？ヨハネによる福音書第10章27-30節をもう一度読んでください。誰がイエスの手からあなたを奪うことができるのでしょうか？

イエスが集められる他の羊：10：16

わたしにはまた、この囲いにはいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。（ヨハネ10：16）

イエスの公的伝導は、異邦人ではなくイスラエルの人々に焦点を当てられていたが、イエスは異邦人の方が救いの教えを非常に受け入れやすい心の状態であったことを知っておられた。実際、公的伝導が終わりに近づいたときに、何人かの異邦人がイエスに会いに来たとき、異邦人（「ギリシャ人」）から来るであろう可能性のある果物について語られた：

そのうちの多くの者が言った、「彼は悪霊に取りつかれて、気が狂っている。どうして、あなたがたはその言うこと

を聞くのか」。他の人々は言った、「それは悪霊に取りつかれた者の言葉ではない。悪霊は盲人の目をあけることができようか」。そのころ、エルサレムで宮きよめの祭が行われた。時は冬であった。イエスは、宮の中にあるソロモンの廊を歩いておられた。するとユダヤ人たちが、イエスを取り囲んで言った、「いつまでわたしたちを不安のままにしておくのか。あなたがキリストであるなら、そうとはっきり言っていただきたい」。（ヨハネ10：20-24）

イエスは、すべての人にとって善き羊飼いでられる。使徒の働きは、イエスの復活の後、福音が異邦人の世に広まり彼らがどの様に神の王国の群れとなっていくかを記録している。イエスが預言された様に、彼らは善き羊飼いのメッセージに飢えていた！

世は善き羊飼いのメッセージをまだ求めている。（参照：マタイの福音書第9章35、36節）。人々は他の「羊飼い」を追っている。あなたの影響力の範囲内で、真の善き羊飼いに誰を紹介する必要がありますか？

討論のための質問

1. 今日、世が従っている羊飼いは誰でしょうか？あなたが対話する人々の生活をどの様な声が導いていますか。
2. マタイ9：35、36を読みましょう。私たちの世界は善き羊飼いの欠如によってどの様に苦しんでいますか？今日この状態をどの様に見ていますか？
3. 詩篇第23篇を読みましょう。この善き羊飼いの肖像は、ヨハネ10章でイエスをご自分について語られたこととどう違うのでしょうか。
4. 今週、イエス様の善き羊飼いの声により同調するためにあなたに何が出来ますか？あなたが消す必要がある他の声はありますか？
5. パリサイ人と議論した文脈の中で、イエスが言及していた偽の羊飼いが宗教指導者であったことは明らかです。今日それが宗教界で活躍していると思いますか。